# 星でつながる偉人たち

## ～八雲とローエル、そして抱影のこと～

金津和義

小惑星番号８１１４は「Ｌａｆｃａｄｉｏ」。ご存知、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）です。１９９６年に当会の安部裕史さんにより発見・命名されました。星になったハーンですが、本当に星に縁があったようです。

★

今から９５年前、火星の研究で知られたパーシヴァル・ローエル（アメリカの天文学者、1855-1916）が、海王星の外側に惑星があることを計算から予言しました。ローエルの没後、１４年経った１９３０年（昭和５年）、弟子のトンボーによってその惑星が発見されました。新惑星は、その発見を知ることなくこの世を去ったローエルに敬意を表して、名前（Percival Lowell）の頭文字のＰとＬではじまる「Ｐｌｕｔｏ」と命名されました。（注）現在「Ｐｌｕｔｏ」は準惑星です。

ローエルは天文学に打ち込む一方で、東洋の神秘にあこがれ、明治時代の日本を訪れます。彼は１８８８年（明治２１年）に未知なる日本の生活や文化を「極東の魂」と題して出版しました。その本が、ハーンが来日を決意する大きなきっかけとなりました。

★

ハーンは東洋への憧れを胸に抱いて１８９０年（明治２３年）に来日し、松江で英語教師になりました。そしてセツ（節子）と結婚し、今に残る数々の怪談など著名な作品を書き上げました。

「知られざるジャパノロジスト」によれば、来日後、日本にいたローエルと交友関係を結んだとされています。

ハーンは怪談のほかにも数々の秀作を残しています。「The Romance of The Milky Way and Other Studies and Stories（天の川縁起　その他）」に納められた「天の川縁起」では、七夕の起源をはじめ、七夕にまつわる歌や出雲地方の風習などをこまかく調べ、天の川や宇宙への想いを綴っています。西洋にはない文化に興味を抱き、深い感銘を受けたようです。

★

１９０４年（明治３７年）、ハーンは早稲田大学文学部で講義を行い、学生に深い感銘を与えました。その中に、後に星の文人と称される当時１９歳の野尻抱影がいました。抱影は「ヘルン先生の思い出」として、講義で受けた感動を書き残しているそうです。ハーンは、講義を行ったその年に５４歳で急逝しました。

抱影の「星座めぐり」などの珠玉の作品の数々は、「ヘルン先生」の心にしみとおるよ

うな語りかけが受け継がれているのかもしれません。そして１９３０年（昭和５年）、抱影はローエルとトンボーによって予知発見された新惑星Ｐｌｕｔｏの和名を「冥王星」と命名（翻訳）しました。

★

私は抱影の本が好きです。抱影は「星三百六十五夜」、「星座春秋」、「星の神話・伝説」など多くの名著を残しました。とりわけ「星座めぐり」は星への興味を持ち始めた頃の新鮮な気持ちを呼び覚ましてくれる１冊です。星座の星々を、ひとに話しかけるように抱影独特の言い回しで叙情豊かに解説してあり、望遠鏡を使わない星の楽しみを存分に味わうことができます。

数年前に、抱影と俳人山口誓子が昭和２１年に著した「星恋」を、古書店で手に入れることができました。稀少本だと思います。戦後で紙質も印刷も粗雑で、定価十五円とあります。月毎に誓子の句と抱影の文が綴られています。１月「星恋のまたひととせのはじめの夜」ではじまります。旧字体なので読み難いですが、味わい深い本です。

★

近代天文学の曙に、星がとりもつ縁でつながった偉人達。その足跡をたどると、新たな気持ちで星と向き合うことができます。

**参考文献**


・「知られざるジャパノロジスト」　～ローエルの生涯～　宮崎正明著　丸善ライブラリー

・「野尻抱影」　～聞書“星の文人”伝～　石田五郎著　リブロポート

・「日本の面影」　ラフカディオ・ハーン著　田代三千稔訳　角川文庫

・「天の川幻想」　～ラフカディオ・ハーン　珠玉の絶唱～ 小泉八雲著　船木裕訳　集英社

・新版「星座めぐり」　野尻抱影著　誠文堂新光社

・「星恋」　山口誓子・野尻抱影共著　鎌倉書房